

# 大友信勝教授・川田譽音教授退職記念号によせて

龍谷大学社会学部学会会長 黒 田 浩 一 郎

私は、2011年4月から2年間の任期で龍谷大学社会学部長、その当て職で社会学部学会会長を務めているが、就任1年目の2011年度末で、大友信勝教授と川田譽音教授のお二人が定年退職される。このような、同時に2人と定年退職は、近年例がないようで、「退職記念号」の「巻頭言」を執筆するに当たって、過去の慣例もないので、タイトルおよび本文では、お二人を氏名の五十音順に並べさせて頂くことにした。

大友教授は、2005年4月に、11年間勤務された東洋大学から本学社会学部臨床福祉学科に赴任され、以来、学部では、地域福祉・臨床福祉学科基礎・共通科目の「社会福祉（学）原論」、臨床福祉学科専攻科目の「臨床福祉学演習Ⅰ・Ⅱ」、「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」などを、大学院では、修士課程の「社会福祉学原論研究」と「社会福祉学原論演習A」、博士後期課程の「社会福祉学特殊演習ⅠA（社会福祉理論）」を担当されている。このように、福祉両学科の初年時学生対象の「原論」の講義から、臨床福祉学科の3・4回生の卒業論文・卒業研究指導、大学院社会福祉学専攻の修士課程と博士後期課程の研究指導までを担われた。

役職としては、本学赴任後2年目にして、大学院社会学研究科研究科長に就任され、2年後、再選された。2期目の2009年6月に学部長の任期途中での辞任があり、選挙の結果、後任学部長に選出され、前学部長の任期の残りの期間、つまり、2009年7月から2011年3月まで学部長を務められた（これに伴い、研究科長の職は2009年11月に辞されている）。研究科長としては、「東アジアプロジェクト」を主導され、東アジアとくに韓国からの大学院社会福祉学専攻留学生を数多く迎え入れることとなり、それらの学生の指導にも当たられた。学部長としては、折しも、任期が「龍谷大学第5次長期計画（5調）」策定の時期と重なり、学部長＝理事として、この「5調」策定の中心メンバーのひとりとなられた。

大友教授は、1966年3月に、日本福祉大学社会福祉学部を卒業後、秋田県庁に就職し、8年間民生部福祉課社会福祉主事を勤められた後、1974年4月に暁学園短期大学専任講師として採用されている。以後、暁学園短期大学、日本福祉大学女子短期大学部、日本福祉大学社会福祉学部、東洋大学社会学部と勤務され、上記のように、2005年4月から定年までの7年間を龍谷大学で勤務された。

研究者としては、日本社会福祉学会、日本地域福祉学会、日本社会政策学会、日本介護福祉学会、社会事業史学会の会員であり、日本社会福祉学会、日本地域福祉学会では、理事を長年にわたって務められている。また、2001年3月には、東洋大学より博士号（社会福祉学）を授与されている。この博士論文は、「公的扶助の展開－公的扶助研究運動と生活保護行政の歩み」（旬報社、2000年）として公刊されており、これに対して、「第3回安田火災記念財団・社会福祉学術文献賞」と「社会事業史学会第21回社会事業史文献賞」が授与されている。

川田教授は、2004年4月に、日本福祉大学から本学社会学部臨床福祉学科に赴任され、以来、学部では、「臨床福祉論」「ソーシャルワーク演習」「社会福祉援助技術現場実習Ⅰ」「臨床福祉学演習ⅠⅡ」などを、大学院では、修士課程の「社会福祉方法論研究」「社会福祉方法論演習A」と博士後期課程の

「社会福祉学特殊演習Ⅱ（社会福祉方法論）」を担当されている。このように、臨床福祉学科の2年次配当の中心的講義科目（2009年度入学生より3回生配当）から3・4回生の卒業研究指導、大学院社会福祉学専攻の修士課程と博士後期課程の研究指導までを担われた。

役職としては、赴任後2年目にして臨床福祉学科主任（2005年4月～2007年3月）、ついで研究科社会福祉学専攻教務主任（2007年4月～2009年3月）、と歴任された。

川田教授は、1966年3月に関西学院大学社会学部を卒業後、夙川学院高等学校教諭（1967年4月～1971年3月）などを経て、1973年4月に関西学院大学大学院社会福祉学研究科社会福祉学専攻に入学されている。そこで博士課程1年を終えたところで、四国学院大学文学部社会福祉学科講師に採用され、11年間勤められた——その間に助教授、教授と昇任されている——後、1987年4月に日本福祉大学社会福祉学部へ転任されている。そこで17年間勤務された——その間に大学院博士後期課程も担当されるようになる——後、上記のように本学に赴任され、定年までの8年間を龍谷大学で勤務された。

研究者そして関係領域での活動としては、日本社会福祉学会、日本医療社会事業協会、日本ソーシャルワーカー協会の会員で、米国の Association for the Advancement of Social Work with Groups の会員でもあった（1992-2004年）。また、四国学院大学時代には「香川いのちの電話相談員スーパーバイザー」、日本福祉大学時代には「名古屋いのちの電話相談員スーパーバイザー」「名古屋市精神保健福祉審議会委員」を務められている。1982年7月から1年間、ロンドン大学（LSE）の客員研究員をされ、その Z. Butrym によるソーシャルワーク原論、The Nature of Social Work, 1976の翻訳もものされている（『ソーシャルワークとは何か—その本質と機能』川島書店、1986年）。また、グループワークの領域でも編著を出版し、この領域の発展に貢献された。

お二人に共通することとして、多数の教科書、解説書・白書、学術書の分担執筆と多数の論文があるが、ここでは紹介しきれない。また、60歳を超えてから、本学に赴任され、定年までの7、8年間という短い期間ではあったが、その間に、学部1、2回生から大学院博士課程に至るまでの学生の教育に当たられただけでなく、学部と大学院の重要役職を歴任されたこともお二人に共通する。この意味で、社会学部・社会学研究科とくに福祉2学科と社会福祉学専攻にとっては、「中継ぎ投手」のような役を見事に果たされたと言えよう。このことに感謝するとともに、後に残る教員団、とくに社会福祉学専攻の50歳代とその前後の教員たちがお二人の果たされた役割をきっちりと継いで行く形で、その貢献に報いる所存である。

最後に、お二人ともお元気で。そして、今後もますますのご活躍を。